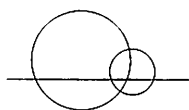


〔講演会〕



東亜同文書院大学記念センター 米沢資料展示会・講演会

置賜が生んだ本間喜一をめぐって

——東亜同文書院大学から愛知大学そして最高裁判所——

米沢地方の歴史風土と本間喜一

愛知大学文学部教授 山田邦明

【司会】 まず最初に、本学愛知大学文学部教授の山田先生より、「米沢地方の歴史風土と本間喜一」という題でご講演をいただきます。では山田先生、よろしくお願いいたします。

はじめに

ただいまご紹介にあずかりました山田と申します。私は日本の歴史を研究しながら、学生にも教えていて、一番の専門は室町・戦国時代です。上杉謙信や直江兼続についてもいろいろ調べておりまして、米沢にもご縁があつて、上杉家文書の調査をさせていただいたり、謙信や兼続をテーマにした講演をしたりというふうに、暖かく迎えていただいています。

そういうわけで、自分の専門はかなり古い時代なのですが、今日は本間先生の少年時代の話という、専門とは違う近代の話をするということになりました。米沢にご縁があつてよく出かけているという理由で、米沢出身の本間先生のことを勉強することになり、今こうして壇上でお話をさせていただ

いている、というわけです。本間先生のご実家にあたる玉庭の小池さんのお宅に、先生の幼少の頃の証書とか賞状とか、そういう文献がいっぱいあるのですが、ありがたいことに、大学のほうに寄贈していただきました。こうした史料を拝見して、興味がわいてしまったのです。それで月に一回くらいのペースで史料の検討をしていきました。成果といえるようなものではありませんが、こうした作業の中でわかったことを、簡単なレポートのような感じでお話させていただきます。

「米沢地方の歴史風土と本間喜一」というタイトルですが、米沢で話すのだから、米沢のことも取り入れたほうが良いという要望にしたがつて、こうしたタイトルにしました。ただ、基本的には本間先生の子供の時の話が中心になりますのでご了解ください。

1 本間喜一と玉庭小池家

最初に本間先生のことと、ご実家の玉庭の小池家のことをお話させていただきます。本間喜一先生といっても、よくわからない方も多いと思い、

略歴をご紹介します。これはほんとうに簡単な略歴です。ご出身は山形県南置賜郡玉庭村、今は東置賜郡川西町に属していますが、そこで生まれました。小池熊吉さんの次男です。小学校の6年間玉庭村にいて、当時は小池喜一という名前だったんですが、中学校入学のときに東京に行って、叔父にあたる本間則忠の養子になりました。それから本間喜一という名前になります。小池喜一から本間喜一へと名前が変わったわけです。とても多才な方で、東大を卒業したあと検事・判事に就任され、弁護士にもなられました。また現在の一橋大学の先生にもなりましたが、その後今日の全体のテーマになっている東亜同文書院大学に転勤されて、上海で教鞭をとられ、昭和19年、終戦の一年前に学長に就任されました。そして、敗戦後上海から帰国しまして、豊橋に愛知大学を創立します。初代の学長ではないけれども、創立の実質的な責任者でした。昭和22年に最高裁の初代事務総長に就任されて、そのあとまた愛知大学のほうに学長として戻りまして、2代目と4代目の学長をつとめられています。このように、いろんなところで活躍されたたいへんな方だということを紹介しました。

本間喜一先生は玉庭の小池家の出身です。この前玉庭の小池さんのお宅にお伺いしたのですが、玉庭というのはまったくした盆地で、おちついたいいところだと実感しました。ご存じの方も多いと思いますけれども、米沢とその周辺一帯のなかでも、玉庭は独特で、鮎川という武将に仕えた武士たちが集まってきたところです。鮎川というのは、新潟県の北のほうの、岩船郡大場沢というところにいた豪族です。この鮎川の家臣がまとまって玉庭に集まってきたのです。こうしたことは『玉庭村郷土史』という本に書いてありますが、鮎川の家臣たちが玉庭にきた経緯については、いろいろの説があるようです。

小池さんのお宅に、本間先生の父にあたる小池熊吉さんが書いた、小池家代々の履歴書がありま

して、そこにもこのことが書かれています。関ヶ原の戦いがあったときに、上杉景勝は石田三成の味方をして、徳川家康と争って、結局負けてしまいます。あの時上杉家の石高は120万石から30万石に減ってしまうんですね。最近の不景気でも給料が減っていますが、要するに給料が4分の1になったわけです。そういうふうな変化があって、家臣たちもたいへん苦勞する。ほとんどの家臣は上杉家に残ったのですが、ほかの主人をさがして再就職する人もいました。小池さんのお宅にある履歴書には、鮎川は金沢の前田のところにお世話になったという説もあると書かれています。

とりあえず鮎川とその家臣たちは金沢にいったけれども、そのあと事情があって、前田家から離れて戻ってきた。ところが米沢のほうでは上杉の家臣たちがぎっしり住んでいて、空き地がない。玉庭しか空いてなくて、玉庭に集められた、そういう言い伝えがあるというのです。ただ、前から玉庭にいたという説もあるようで、ほんとうのところはよくわかりません。

玉庭の武士たちの先祖のことが書かれている古い時期の史料をひとつとりあげたいと思います。「文禄三年定納員数目録」という帳簿です。文禄3年というのは豊臣秀吉の時代、西暦1594年にあたります。その時期に越後の上杉景勝が家臣団の名簿を作った。これが「定納員数目録」ですが、そこに鮎川の家臣の名前が全部載っているのです。まず「越後鮎川同心鮎川在番」とあって、最初に「穂保城左衛門」が登場します。彼の持高は42石5斗で、特別に多いのです。おそらく家老だと思いますけれど。そのあとに21石を持っている武士の名前が続きます。「伊藤兵作、小田切武兵衛、寺島九右衛門、新保惣五郎、白根沢伝七、大橋十右衛門、小池権右衛門、山家次左衛門、菅原善兵衛、長谷川名左衛門」というふうに。そしてつづいて11石3斗をもつ「大島仁兵衛、野原三郎左衛門、小野小兵衛、穂保九兵衛、加茂与九郎」、8石5斗の「中山五右衛門、磯部利左衛門、

高橋十助、長谷川喜右衛門、渋谷太左衛門、本間五助、川村平作、小池理右衛門、小野左内、松田才門、村岡外記」というように、武士の名前が書き連ねられています。

これがいわゆる鮎川の家臣たちの名前です。ここに小池さんも本間さんもいるんです。ですから小池という苗字の人と本間という苗字の人は戦国時代からいたということなんですね。このころには小池さんも本間さんも鮎川に従って越後にいたわけです。

史料1の最後のところに、普済寺というお寺がみえます。持高は11石8斗です。玉庭に普済寺という寺がありますが、鮎川とその家臣がもった越後の大場沢にも普済寺があります。玉庭に来た鮎川の家臣たちは、ここに自分たちのお寺をつくって、もともとのお寺と同じ名前をつけたのです。今でも玉庭の方々の多くは普済寺の檀家なのですが、小池さんのお宅は普済寺ではなくて米沢のお寺の檀家だということで、どうしてそうなったかはよくわかりません。玉庭の歴史はまだまだ謎が多くて、『玉庭村郷土史』を読んでもよくわからないことがたくさんあります。

本間先生のお父さんの小池熊吉さんはなかなかの人物だったようです。戊辰戦争の時には14歳で戦争に参加しています。最年少でした。それから玉庭村の村長さんもつとめられています。また、小池家に今も残っておりますけども、熊吉さんが作ったとても詳しい書き物があります。自分の経歴も含めて代々の先祖のことをきちんと書いているのですが、こうした書物を目にすると、やっぱりお父さんも優秀な方だったんだなと実感します。

2 玉庭尋常小学校と小池喜一

つづいて、これが今回のお話のメインなんですが、小学校の頃の本間先生はどんなふうだったのかというのを、ゆっくり話していきたいと思います。小池（本間）喜一は明治24年7月に玉庭で生まれて、30年4月に玉庭尋常小学校に入学し

ています。当時の尋常小学校は4年間ですね。その間にもらった修業証書や賞状とかがありまして、全部残っています。なかなか貴重なものですが、そうしたものをもとにして、こういう年表を作りました。

明治33年11月、4年生のときに、書道の作品で賞状をもらっています。南置賜郡第四部教育会から賞状をもらっているのです。それから翌年の3月には、南置賜郡役所から硯箱をもらっている。この理由が「品行方正学業優等」です。成績優秀で品行方正だと硯箱がもらえる時代があったんですね。

その後小池さん（小池君と言ったほうがいいかもしれません）は、4年で卒業しますが、そのあと補習科というのに入ります。今の5年生、6年生という感じでしょうか。それを2年間で終えて、今の中学1年生の段階で中学校に入ります。中学校は東京の大成中学校、東京市神田区三崎町1丁目3番地、今の水道橋駅の近くにありました。このとき叔父にあたる本間則忠の養子になって、本間喜一という名前になるわけです。そしてその2年後には東京府立第四中学校（四谷区荒木町27番地）に転校します。

このへんのところもかなり詳しいことがわかります。なぜかと申しますと、本間君は東京に行って、たとえばいろんな成績表とかもらいますが、それを実家に届けているんですよ。つまり自分のところに置かないで、「こんなに勉強したんだよ」ということを証明するために現物を送っていて、それが結局小池さんのお宅に残ったということです。そしてその中にいろんな細かなことが書かれているのです。

中学4年生のときには器械体操部柔道部に加入しています。東京府立第四中学校の通信簿というのがありまして、帳面になっております。身長や体重が書いてあったりして、成績表も入っているのですが、そのなかに連絡簿みたいなものもあります。今日はお腹が痛いので休みますとか、そう

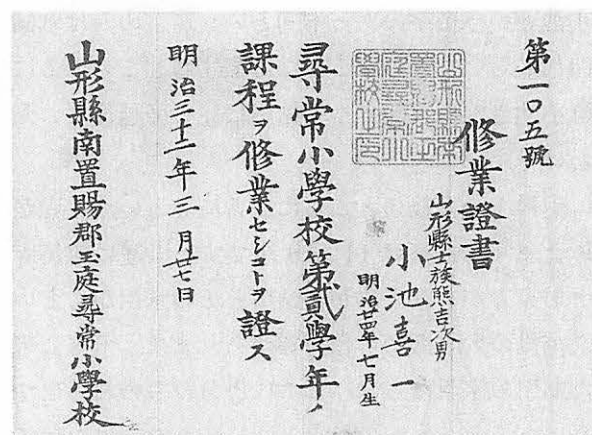
いう連絡事項が書かれている。その中に、器械体操部柔道部に加入したいのをお願いしますという記事があります。

このように、小池さんのお宅に残された文献から、小池（本間）喜一の履歴がわかってくるのですが、こうした作業をするなかで、とくに玉庭尋常小学校のことに関心を持ってしまいました。と申しますのは、明治30年頃というのは、小学校の制度がなんとか整えられて、義務教育というものが始まったばかりで、みんないろいろと苦労している。生徒も集まらない。来てもすぐ休んでしまう。そういう状況の中で、どんなふうに教育が進んでいったのか、ということを考える時に、今残されておりますこの尋常小学校関係の史料は非常に面白い材料なんじゃないかと思ったわけです。それで、本題とは少し外れますけれども学校の話をしていきます。

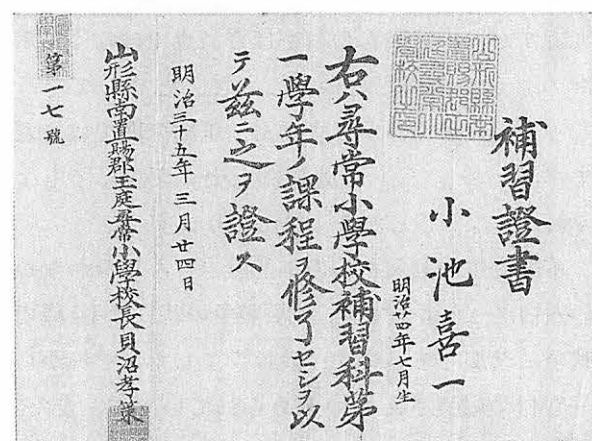
玉庭尋常小学校関係史料の内容を抜粋して示しておきました。写真もありますので、写真を見ながらお話をしたいと思います。はじめに、修業証書と補習証書を紹介します。最初の史料が明治32年3月の修業証書（写真1）。これは2年次が終わったことを証明するもので、進級祝いみたいなものです。今はこんなのありませんよね。2年生が終わりましたよ、おめでとうというかんじの、こういう証明書が当時はちゃんとあったんです。

それで面白いのは、この修業証書を見ますと、印刷の部分と手書きの部分とがはっきりわかるんです。「修業証書」というタイトルと、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校」という学校名は印刷になっています。「尋常小学校第貳学年ノ課程ヲ修業セシコトヲ証ス」という本文はほとんど印刷ですが、「第貳学年」のうち「貳」の文字だけは手書きです。どの学年にも対応できるように、この部分は空きになるように彫ったのです。そして「山形県土族熊吉次男 小池喜一」は手書きです。本人の名前だから、手書きなのは当たり前ですけど。それで、「明治三十二年三月廿七日」とい

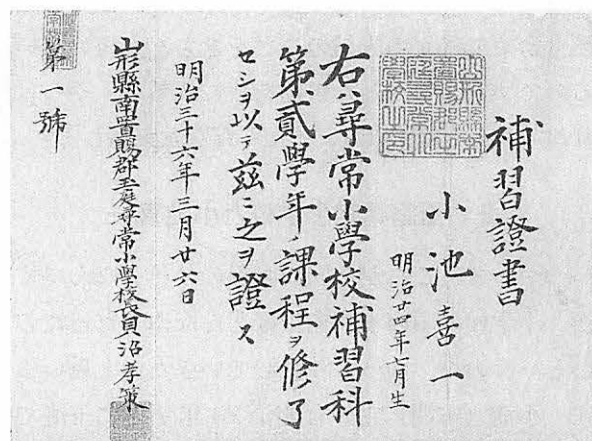
う日付のうち、「明治」「年」「月」「日」は印刷で、「三十二」「三」「廿七」は手書きになっています。この証明書は木版印刷ですが、年・月・日のところは空けてあって、そこに手書きで記入しているわけです。また「第一〇五号」という番号も、「第」「号」は印刷で、「一〇五」は手書きです。



(写真1)



(写真2)



(写真3)

こういう形で修業証書というのが作られます。

その翌年、彼は4年で卒業して、そのあと補習科に入ります。補習というと成績のよくない生徒が余計に勉強することのように思えますけれど、今の補習と違いまして、これは卒業したあとも余分に勉強しますという意味ですね。二つめにあげたのは明治35年3月の補習証書で、「右ハ尋常小学校補習科第一学年ノ課程ヲ終了セシヲ以テ茲ニ之ヲ証ス」と書いてあります（写真2）。要するにプラス1年間勉強しましたという証明書です。

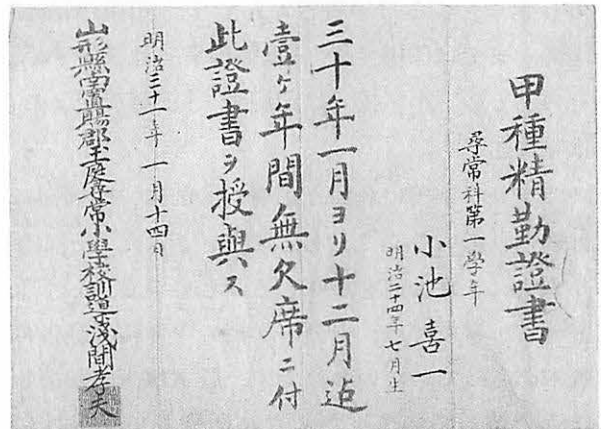
ここで面白いのは、最初にみた修業証書には「第一〇五号」とあって、小池喜一は105人目ですけれども、補習証書の番号は「第一七号」です。人数がかなり減っている感じがしますね。補習科に進む生徒は限られていたのでしょうか。

そして小池喜一は、翌年2年次の補習証書をもらって転校します（写真3）。この補習証書は文章は全く同じですけれども、違うところがあります。写真を見ればわかりますね、これ、全部自筆なんです。1年次の補習証書は印刷物に名前を書いただけなんですけど、2年次の補習証書は、オーダーメイドの、全部自筆の補習証書なんです。どうしてこうなのかかわからないのですが、ここには「第一号」とあります。ひょっとしたら1人しかいなかったのかもしれませんが。詳しいことはわかりませんが、こういうところから当時の小学校がどのくらい学生を抱えて、どんなふうに教育をしていたのかということの一端が見えてくるのではないかと思います。

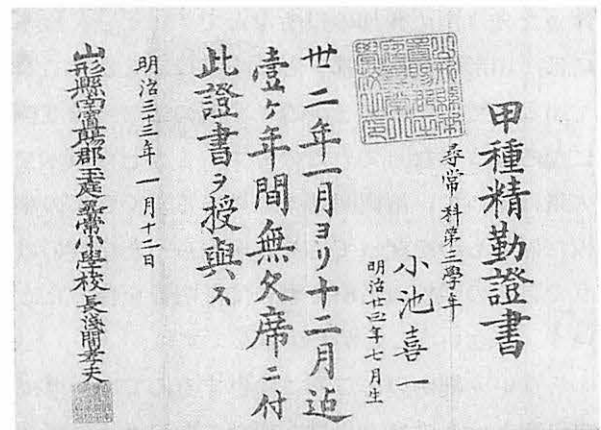
つぎに「精勤証書」というものを見ていきます。欠席しないともらえる「甲種精勤証書」というものがあります。最初のものは明治31年1月に出された甲種精勤証書で、「尋常科第一学年小池喜一」「明治二十四年七月生」「三十年一月ヨリ十二月迄壹ヶ年間無欠席ニ付、此証書ヲ授与ス」と書かれています（写真4）。皆勤賞ですね。今は皆勤賞でも賞状もらえないと思うんですけど。そして「明治三十一年一月十四日」「山形県南置賜郡

玉庭尋常小学校訓導浅間孝夫」と書いてある。当時は校長のことを「訓導」と言ったんですね。

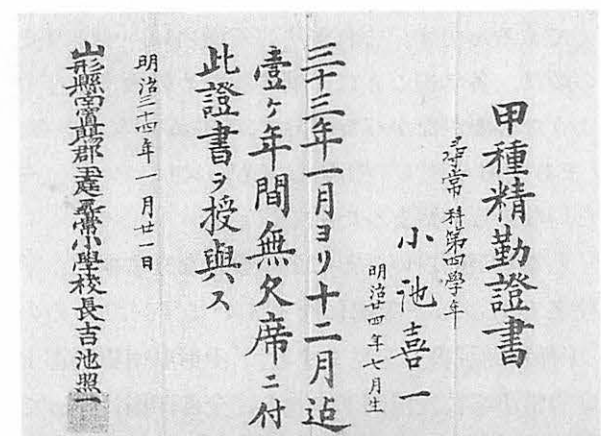
2番目も同じようなもので、明治33年1月に出された、尋常科3年生の時の甲種精勤証書です（写真5）。つぎのものは4年生の時の甲種精勤証書です（写真6）。この三つの証書は、文章はそっ



(写真4)



(写真5)



(写真6)

くりなんです、よく見ると微妙に違います。写真をよく見ると、墨の色が違うのがわかりますか。いちばんおわりの行を見ていただきたいんですが、最初の証書では、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校訓導浅間孝夫」のうち、「山形県南置賜郡」までは薄いけれども、「玉庭尋常」が黒くみえるでしょう。ここは手書きなんです。「山形県南置賜郡」までは印刷です。「玉庭尋常」は手書きで、そのあとの「小学校」は印刷で、「訓導浅間孝夫」は手書きです。

つまり小学校の名前と訓導の名前は、印刷物には刷られていなくて、あとで書きこんだことになります。これは何を意味するかといいますと、玉庭尋常小学校では、自分の学校の甲種精勤証書の版木をもっていないわけです。版木は南置賜郡のほうで持っていて、たくさん印刷して小学校に配ったということになります。つまりこの版木を作ったのは南置賜郡の役所なんです。そして版木には「山形県南置賜郡」と「小学校」しか彫られていなくて、学校名と訓導の名前のところは空欄になるようになっていたのです。こうした版木で大量に刷って、南置賜郡の中にあるたくさんの学校に同じものを配って、それをもらった学校のほうで自分の学校の名前を書いて証明書を作ったという、そういうことがわかるんですね。

こういう細かいところに注目するんです、歴史の研究というのは。一見些細なことのように思えますが、こうした細かなことから大事なことが見えてくるんです。これがすごく面白い。つまりその頃は、各学校ごとに印刷するための版木を作るような必要がなかったのです。学生が少ないから、「まあ100枚ぐらい印刷してもらえばいいよ」みたいな感じで始まったんでしょう。

ところが面白いことに2年後になりますと、学校名もちゃんと印刷になっています。二つめの「甲種精勤証書」を見ますと、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校校長浅間孝夫」と、全部印刷になっています。つまり、それまで手書きで書いていた

「玉庭尋常」のところも、木版刷りになっているのです。とうとう玉庭尋常小学校でも、自分で版木を作ったわけです。写真を見ればわかりますが、一つ目と二つ目の証書の書体はほとんど同じです。書体もいままでのものとそっくり同じようにして、版木を作ったのです。

当時はワープロもありませんから版木を彫るんですよ。しかもきれいに彫る。同じような書体で彫るんです。そこまでなくてもいいのにね。だけどきれいに彫っていったら、しかも追加して玉庭尋常小学校のところまで彫る。そうすると自分の小学校のオリジナルな版木ができる。こんなふうにしていたことがわかります。そして三つ目の証書になると、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校長吉池照一」というふうに、校長名が変わります。校長が替わると、わざわざ新しい版木を彫ったのです。

ちょっと復習してみます。明治31年1月に作られた30年度の甲種精勤証書は、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校訓導浅間孝夫」のうち、「玉庭尋常」と、「訓導浅間孝夫」は手書きになっている。ところが2年後の明治33年1月の証書になると、「山形県南置賜郡玉庭尋常小学校長浅間孝夫」というふうに、全部印刷になります。そして翌34年1月の証書では「山形県南置賜郡玉庭小学校長吉池照一」と、校長先生の名前が変わっている。こういう微妙な変化があるわけです。毎年毎年新しい版木を作っていくわけですね。

このように皆勤賞だと賞状をもらえたわけですが、ちょっと休んでも「乙種精勤証書」という賞状をもらえました。明治32年3月にももらった「乙種精勤証書」がありますが、「三十一年一月ヨリ十二月迄壹ケ年間出席多数ニ付、此証書ヲ授与ス」と書かれています。皆勤賞じゃなくても表彰状がもらえるという、そういう話です。そして面白いことにこの表彰状は全部手書きなんです。どうして乙種は手書きなのかわかりませんが、出す枚数が少なかったのかもしれない。

それから「賞与証書」とでもいえるような証書

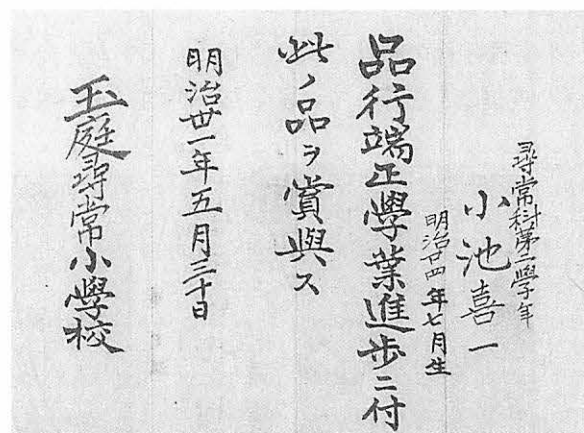
も出されていました。当時は皆勤賞だけではなく、「品行端正学業進歩」といった理由で賞品をもらえたのです。最初のものは明治31年5月30日の証書で、「品行端正学業進歩ニ付、此ノ品ヲ賞与ス」とあります（写真7）。何だかわからないですけどね、何かもらったんですよ。サービス満点ですね、当時の小学校っていうのは。それで「玉庭尋常小学校」と書かれています。次にあげた32年3月27日のものには「一等」とあって、やはり「品行端正学業進歩ニ付、此ノ品ヲ賞与ス」とあります（写真8）。さらに33年3月28日のものも「壹等」で、同じ文章があります（写真9）。

この三つの証書の写真を見ていただきたいのですが、最初の明治31年の証書では「玉庭尋常小学校」のうち「玉庭尋常」が明らかに手書きです。ところが2年目からは「玉庭尋常」も印刷になっています。二つめと三つめは版本は同じなのですが、紙が違います。三つめの紙はとても上質になっているのです。明治33年のものは斐紙という上質紙になります。鳥の子という、上質のつるつるした紙です。楮で作る普通の紙ではなく、雁皮を原料とするつるつるの紙に変わるんですね。要するに紙の質が急に良くなる。

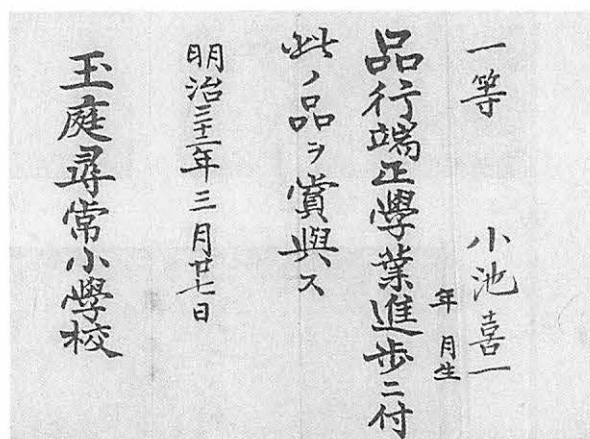
これは画期的なことですよ。つまり、景気が良くなったのです。明治30年代のはじめというのは、ちょうど日本が、日清戦争の勝利もあって調子よく成長していた時期ですから、毎年毎年紙が良くなるんです。明治32年の時は普通の楮紙だったものが、明治33年になると斐紙になって、しかも34年になると紙が白くなるんですよ。どんどん紙質が良くなっていることが分かります。

つまらない話かもしれませんが、こういうふうに昔の手紙が残っていると、いろいろなことがわかるんですね。多くの人の記憶をもとに歴史を再現することもできますが、やはり残った証拠というのが大事なんです。ここでとりあげたような史料を分析すると、昔の小学校がいかに学生確保に悩んでいたかがわかります。毎年進級するごとに

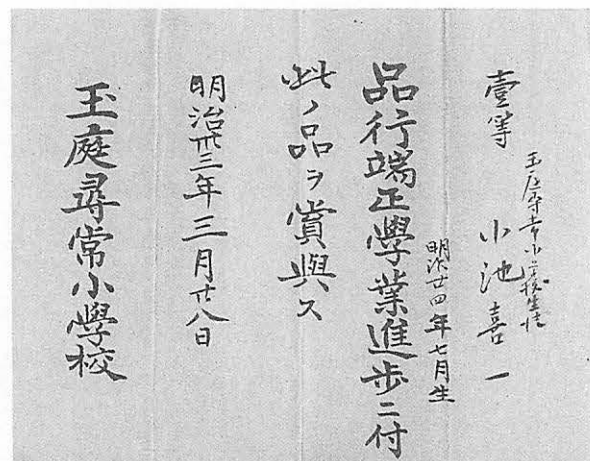
きちんとした証書を作ってやったり、あるいは皆勤賞だったら表彰状を書いたり、品行方正だったりすれば賞品がもらえるっていう、そういう時代があったんだということがわかりますし、また明治30年代のはじめ、日本の経済が上向きになる



(写真7)



(写真8)

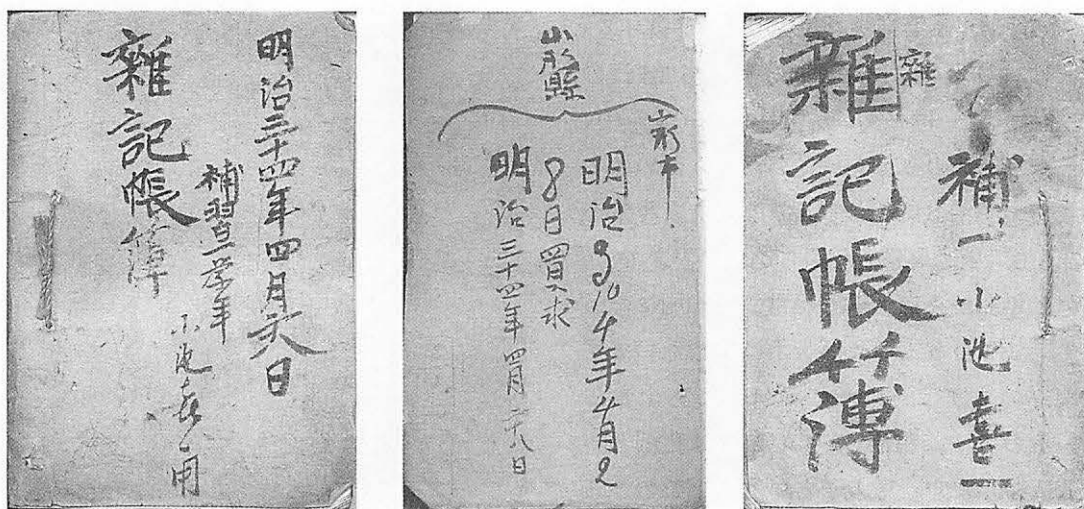


(写真9)

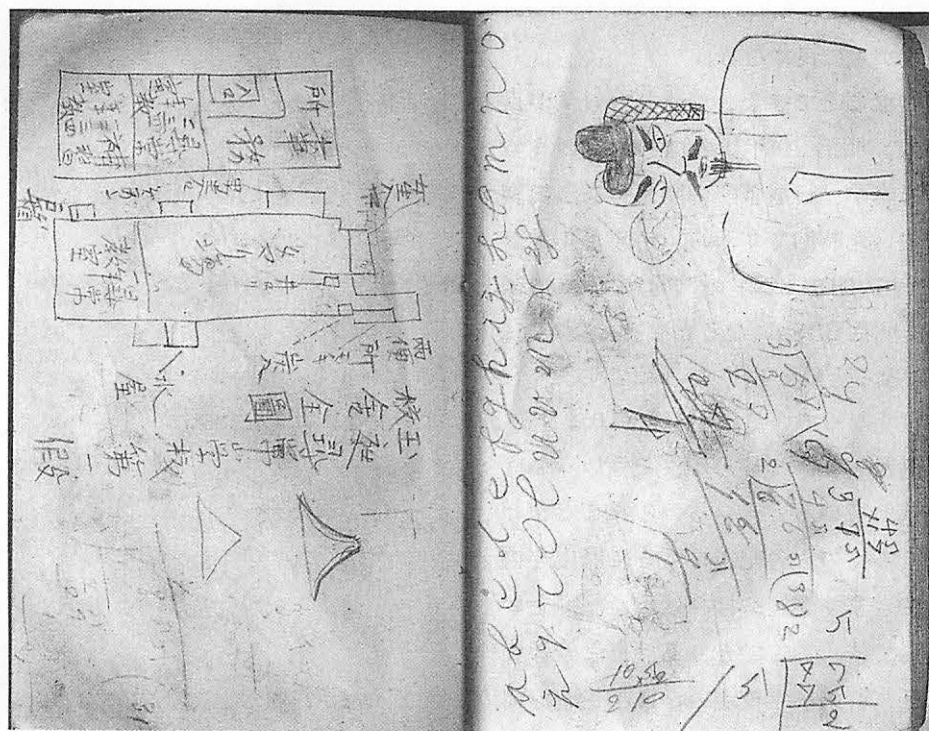
時期には、どんどん学生も増えていって、印刷するいろんな書類を学校のほうで作るようになってくる。そして紙質も良くなっていくという、そういう大きな変化があったということがわかってまいります。こういう中で本間先生は頑張って勉強するわけです。

小学校時代の話はこれで終わるんですが、ひとつ大事なことを忘れていました。小池喜一が残し

た『雑記帳』のことです。現物が展示されていますけれども、これが非常に面白いのです。けっこう厚いノートなんですね。表表紙と裏表紙の写真を載せておきましたが、両方表紙ということなんです（写真10）。真ん中の写真は一番後ろのほうの見開き部分ですけども、ここからいつこのノートを買ったかがわかる。明治34年の4月28日に山形市で買ったんですね。ただこの書き方を



(写真10)



(写真11)

みると、ちょっと笑っちゃいますね、明治34年を「3」「10」「4年」というふうに縦に書いている。この書き方、大物の素質ありますよ。でもちょっと反省したんでしょうかね、その左に漢字で「明治三十四年四月二十八日」と書いています。

中身をみても、非常に面白いノートなんですね。ノートの中のひとつのページの写真を出しておきました（写真11）。見開きの左頁のほうに学校の図が書かれていて、「玉庭尋常小学校第一仮校舎全図」とタイトルがついています。当時玉庭尋常小学校は改築中で、仮校舎で勉強していたのですが、10歳の少年がこの仮校舎の見取図を書いたわけです。

これは非常に面白くて、真ん中に「タマリ場」と書いてありますよね。「井ロリ」もみえます。その右のほうへ行きますと「両便所」、左にいくと「女生入口」があつて、「男生入口」は別のところにあります。男子生徒と女子生徒の入口は別だったんですね。そして「尋常一年教室」「事務所」「尋常二三四年教室」「補習一二三四年教室」とか「水屋」とか、とにかくくわしく書きこんでいます。

こんなふうに、何か絵がいっぱい書いてある楽しい帳面なんです。見開きの右頁には人間の絵が書いてあります。誰なのかよく分かりませんが。それからアルファベットを勉強していて、a b c d e f g……と書いてみたり、またグルッと回して算数の計算があつたり、もう縦横無尽なんです。とにかく書き方が自由なんですね。

今のふつうのノートには罫線がありますよね。あれうっとうしいと思った方いらっしゃるかもしれません。私もあまり好きじゃなくて、なにか考えるときには罫線のない白紙に書きます。ふつうのノートだと字配りがまともになりすぎて、つまらないんですね。もっとアバウトにドローイングしたほうが頭が整理される場合もあるのです。南方熊楠という大天才のメモは、いろんな文字がいっぱいあちらこちらに向かって書かれてある、というこ

とを聞いたことがあります。本間先生もそういうタイプだったように思えます。

それからこのノートは、よく見るとわかりますけども、何か消したあとがいっぱい見える。つまり当時は紙が貴重だから、書いては消し、書いては消していたのでしょう。黒い板にチョークで文字を書いたり、砂のうえに棒で絵を描いたりした経験のある方も多いと思います。昔は白い紙なんでもったいないから使えなくて、広告の裏か何かで勉強した。私もその口ですけれども。小池君はノートを買ったのが嬉しくてしょうがなかったんですね。紙のノートを買った。しかもこのノートは紙が厚いんですよ。何度消しゴムで消しても壊れない紙です。こういう丈夫な紙なので、書いては消して、また書いて、また消して。そして最後に書いたのがこういうふうに残っているという、そういうことです。

この『雑記帳』には玉庭の地図も描かれています。この部分は展示室で展示していますが、道路や家をかなり正確に描いています。玉庭の方はご覧いただいて、自分のお宅があるか確認していただければいいんですが。こんな感じで、とにかく自由な書き方をする生徒だったようです。

3 中学校時代の本間喜一

つづいて中学校時代の本間先生についてお話したいと思います。中学校時代は東京に行きますので、玉庭を離れるんですけども、前にお話しましたように、本間先生はご実家に自分の成績証明書を送り届けていて、それが残っているの、成績は全部バレバレなんですね。あんまり人の成績の話をするのは、プライバシーの侵害で、申し訳ないんですけども、まあ昔のことなので。

大成中学校の成績表は葉書なんですよ。しかも保護者宛の葉書。今は子供に「お父さんお母さんに見せてね」と渡しますよね。当時はダイレクトに親御さん宛の手紙が発送されるという形になっていました。一年生のとき（明治36年）の

第一学期と第二学期、二年生のとき（明治37年）の第二学期の成績を書いた葉書が残っているので、これをもとに成績の一覧を作りました。【表3】です。懐かしいですね、修身というのがあります。国語、漢文、作文、外国語、地理、歴史、算術、代数、幾何、三角、博物、物理、化学、習字、図画、体操と続いていて、平均の評価が書かれています。そのあとに操行（普段の行ない）の評価があって、最後に総員が何人で席次が何番かが書かれています。

【表3】大成中学校在学中の成績表

	第一学年 明治36年度		第二学年 明治37年度
	第一学期	第二学期	第二学期
修身	乙	乙（甲）	乙
国語	乙	甲（乙）	甲
漢文	甲	丙（甲）	乙
作文	乙	乙	甲
外国語 甲	乙	甲	甲
外国語 乙		（甲）	甲
地理	甲	甲	甲
歴史	甲	甲（丙）	甲
算術	甲	乙（甲）	甲
代数		（甲）	甲
幾何			
三角			
博物	乙	甲	甲
物理			
化学			
習字	乙	乙	乙
図画	乙	乙	乙
体操	乙	甲（乙）	甲
平均	乙	乙	甲
操行	乙	乙	甲
総員	92	94	95
席次	25	21	11

※明治36年度第二学期の（ ）内は、手書きのメモ。

この表からわかるように、大成中学校では甲・乙・丙という評価方法をとっていました。総員を見てみると92～95名ぐらいですね。明治36年の一学期・二学期と、37年の二学期の成績がわかるのですが、これを比べてみると、だんだん成績が上がっていることがわかります。1年生の一

学期は25番ですけど、二学期が21番、2年生の二学期は11番というふうに。やっぱり勉強されただと思いますね。

1年生の二学期のところを見ていただくと、かつこの中に甲・乙・丙といった文字がみえますが、これは手書きのメモの内容を示しています。葉書の成績表に手書きのメモがあるんですね。本人の字かもしれません。たとえば「修身乙」と書いてあるところに、「甲」という書き込みがあるわけです。自分の判断を加えたのかもしれませんが。自分はこう思うって。だったら面白いですね。修身は乙だけど、僕は頑張ったから、自分としては甲だとか、国語は甲だけど、自分としては乙かな、といったふうに書いている可能性もあるんです。

3年次で東京府立第四中学校に転校しますが、こちらの成績表は冊子になっていまして、10段階評価です。学校によって違うんですね。ここでの成績も【表4】にまとめてみました。この成績

【表4】東京府立第四中学校在学中の成績表

	第三学年 明治38年度	第四学年 明治39年度	第五学年 明治40年度
修身	7	7	7
国語	6	8	8
漢文	6	7	6
作文	7	6	6
習字	6		
英講読	7	6	7
英会話書取	7	5	8
英文法作文	6	5	6
地理	7	9	8
歴史	8	8	6
代数	7	9	
幾何	9	9	8
三角法			7
博物	7	6	
物理化学		9	8
図画	6	7	
体操	6	7	8
合計	102	108	93
平均	7	7	7
操行	乙	乙	乙
席次	17	9	7

表には各年度ごとに一学期、二学期、年度末の成績と、その年度の平均の成績が書かれているのですが、ここでは各年度の平均の成績を表にしてみました。修身、国語、漢文、作文、習字、英講読、英会話書取、英文法作文、地理、歴史、代数、幾何、三角法、博物、物理化学、図画、体操とあって、それぞれ十段階の評価が書かれ、そのあと数字を合計して、平均の評価を出しています。最後に操行の評価がありますが、これだけは甲・乙・丙です。第3年次、第4年次、第5年次、全部ありますけれども、こんなふうな成績でした。平均はずっと「7」だったんですけれども、席次が17→9→7というふうになっています。

だから本間先生はどんどん成績が上がっていった方なんだな、と思います。最初は普通だったのが、だんだん上がっていったということが、こうした史料からリアルに実証できるわけで、やっぱり勉強されたんだと思います。そのあと高校、大学に進みますが、このころのノート類がいっぱい揃っていて、これがたいへんなノートなのです。一所懸命勉強されたことがわかります。ここまでが中学時代までの本間先生のお話です。

4 本間則忠の活動

これで本間先生のことは終わりますが、養父に当たる本間則忠さんのことも少しお話ししたいと思います。本間喜一先生もあまり有名ではありませんが、本間則忠もそれほど知名度があるわけではありませんので、一緒にご紹介したいと思っています。本間則忠の年譜は則忠の履歴書をもとにしましたが、1995年に武蔵学園記念室で編集発行した『武蔵学園史年報』創刊号も参考にしました。

東京に武蔵大学という大学があります。私も実は武蔵大学で非常勤として授業をしたことがあるんですが、武蔵大学よりむしろ武蔵高校のほうが有名かもしれません。武蔵高校は有名な進学校です。はじめ高校があって、あとで大学を創ったの

です。根津嘉一郎さんという東武鉄道の社長もつとめた企業家の方が資金をなげうって武蔵高等学校を作ったんですが、実は武蔵高校の設立に一番尽力したのが本間則忠さんだったんです。武蔵学園では自分の学校の歴史を調べて、『武蔵学園年報』創刊号という、すばらしい本を刊行したのですが、そこに本間さんの書かれた文章も収録されています。

本間則忠は本間喜一の叔父さんで、やっぱり小池さんのお宅の出身です。小池熊吉の弟に当たります。本間丈助の養子になって本間姓になるんですが、東京で勉強して、文部省の普通学務局第一課長になります。その後事務官として各地を転々とします。まず島根県に行って、松江に下女学校を開校します。それから山梨県の事務官、鳥取県事務官と移って、さらに大分県に行くんですね。要するに高級官僚としてあちらこちらへ転動したわけです。

この大分県にいた大正4年に、別府温泉で本間則忠は根津嘉一郎と会います。そこで根津さんに学校を作ったらいいですよと勧めたわけです。根津さんは企業家ですが、当時の企業家は今と違って（と言うと怒られますけど）、お金を儲けた場合には社会に還元したいというふうに思っていたようです。大変な収入があったと思うんですが、それを自分の会社のためというよりも世の中のために使いたい、どうしようかと思っていたらしくて、その時に本間さんが「学校を創るのが一番いいですよ、優秀な学生を育てる学校を創るべきですよ」というふうに勧めた。これが武蔵高校の出発点なんですね。そしてやがてこれを実行に移すんです。大正7年に本間さんが大分県から栃木県に移った、関東に来たのが大きな転機で、それから根津と本間はひんばんに会って相談をするようになります。そして大正8年に、高校設立の話が具体的に動き出します。

あとでもお話ししますが、米沢出身の平田東助という政治家がいて、本間則忠はこの平田東

助と親しいわけです。同郷のよしみでこの政治家に協力を依頼して、とんとん拍子に話が進んでまいります。そして評議委員会が組織されて、本間が幹事になります。2年後の大正10年に財団法人根津育英会による武蔵高等学校の設立が認可されて、本間は理事になります。

これが今の武蔵高校の出発点なんですけど、面白いことに、この時本間則忠はいろんなことを書いています。その文章が残っていますけれども、けっこういいことを言っているんですね。武蔵高校は私立ですが、「私立高校に行った人は東大には行けないというジンクスがあるが、あれは嘘だ」とか、いろいろと書いてある。それからあと「いい先生を採るにはどうしたらいいのか」というのがあります。「いい先生が必要だ。そのためには給料を上げなくちゃいけない」。こういういいことが書いてあるんです。

それから面白いのは、鉄筋コンクリートにしたいって言うんですよ。最初は木造校舎でいいと思ったらしくて、「木造で」というふうに申告したんですが、突然気が変わって「鉄筋コンクリートにしますから」と言って、あらためて書類を書いて申請するんですね。理由がふるっていまして、「最近コンクリートの値段が下がっている」。経済に敏感なんですね。「鉄も下がっている、コンクリートも下がっている、自分がこの学校を創ろうと思った頃には夢のようだった鉄筋コンクリートが目の前まで来た。だから、いちど書いたものを直すのは格好が悪いけれども、やっぱりやりたくなっちゃった」と、延々と面白く書くんです。「鉄の値段もコンクリートの値段も2分の1になった。だから鉄筋コンクリートにしてもなんとか予算内に収まる」とか、そういうことを具体的に書いていますが、非常に情熱的に文章を書く方だと思います。

こんな感じで武蔵高校創設の一番の功労者として今でも称えられている方です。それから、本間則忠は富士見高等女学校の初代校長にも就任され

ていますが、書類によりますと校長は本間則忠ですけれども、責任者は本間丈助となっています。これは本間則忠の養父に当たる方ですね。実際の設立者は本間丈助だというふうに記録されているのです。

あとになって本間喜一先生が愛知大学を創られるわけですけども、やっぱり自分の養父のやったことを真似しているんですね。自分の叔父さんであり養父だった則忠の行動を見ながら、自分も同じような年頃、50歳代になって、同じようなことをしているという、そういう流れなんじゃないかなと思います。

5 米沢地方の歴史風土と本間喜一

そろそろ時間になります。いままで本間喜一先生の少年時代のことを、古文書や記録を見ながら再現してきましたが、やっぱり「米沢地方の歴史風土と本間喜一」というタイトルを付けてしまったものですから、もうちょっと大きな話もしてみたいと思います。

玉庭というたいして広くもない地域の中から、これだけのことをされる方が2人現れたというのは驚くべきことです。どうしてあんなところから偉い人が出てくるのかと考えますと、どうも玉庭に限った話ではなくて、この置賜というところがとんでもないところだということにちょっと気づき始めています。近代のことはよく知らないのですが、こんなところでお話をする立場でもないんですが、とりあえずにわか勉強をしました。米沢児童文化協会が編集した『郷土に光をかかげた人々』という本があります。これは小さいけれども、わかりやすいいい本です。こういった本をもとにしながら、置賜出身の人物を年齢順に並べてみようと思いたって、一覧表を作りました。

偉い人を年の順に並べて、本間則忠と本間喜一をそのなかに入れてみたわけです。いちばんの先輩は宮島誠一郎。たいへん活躍した官僚、政治家で、最後は貴族院議員になった方です。この方が

1838年の生まれ。それから今お話をしました平田東助。これも政治家ですが、彼が1849年の生まれですね。それから海軍大将の山下源太郎が1863年。このあたりがまあ一番の年配クラスで、明治維新の頃にはもう生まれていたわけです。山下源太郎は若いですが、宮島誠一郎は維新のころは30歳、平田東助は20歳近くになっている。

そのあとに宮島大八がいます。これは誠一郎の子供です。書家として有名な方で、中国の研究もされていますけれども。この方が1867年、ちょうど大政奉還の年に生まれています。それから池田成彬。実業家、政治家で、近衛内閣の大蔵大臣になった方ですが、これも同じ年ですね。それからおそらく一番有名かも知れませんが、建築家の伊東忠太。伊東忠太は東大の正門も作って、いろんなところに作品があるんですが、彼がやっぱり同い年なんですね。宮島大八と池田成彬と伊東忠太の三人が同年生です。それから大橋乙羽。これは音羽屋さんの方ですけども、文豪の大橋乙羽が1869年生まれです。それから学校を創られた九里とみ（1872年生まれ）、電気通信事業に関係した秋山武三郎（1873年生まれ）、国文学者の五十嵐力（1874年生まれ）。このあたりがブラッと並んでいるわけですね。みんな1870年代の生まれです。80年代になると哲学者の高橋里美（1886年）、学校創設者の椎野詮（1887年）、作曲家の大沼哲（1889年）がいます。童話作家の浜田廣介も米沢生まれなんですね。1893年です。そのあと思想家の大熊信行（1893年）や、画家の椿貞雄（1896年）、民法学者の我妻栄がいます。我妻栄は1897年の生まれです。


こういうふうに並べてみますと、宮島誠一郎から我妻栄まで、だいたい60年ぐらいのあいだに、次々いろんな人が米沢やその周辺で生まれていたことがわかります。これだけ有名な人がこの地方から登場しているわけで、何か非常に濃密な世界だという感じがします。つまり偉い人が出るとこ

ろなんです、置賜というところはね。そしてその中に本間則忠も本間喜一もいたわけです。

年代的に申しますと、本間則忠は1865年生まれですから、宮島大八、池田成彬、伊東忠太の2歳年上になります。だから幕末から明治の初め頃に生まれて、大正初期頃にいちばん活躍した世代の一人だったわけです。本間喜一先生は則忠の養子ですから時代は下って1891年の生まれです。その頃に芸術分野や文学の世界とかで活躍している方がたくさん出てきています。

まああとは精神論に近いんですけど、どうして米沢とか置賜からこういうふうな学者とか政治家とかが出てくるのかなと思った時に、やはり上杉軍団のことが思い浮かぶわけです。私も新潟県出身なので上杉には思い入れがあるんですが、上杉というのは残ったんですよね、大名として。戦国時代というのはたいへんな時代でして、大名がほとんど滅亡するんですよ、今川も武田も北条も滅びます。長宗我部も滅びます。ところが残った大きな大名が4つあるんですね。伊達と上杉と毛利と島津です。ただこうした大名もいったんは負けているんです。負けるけれども家はなんとか残して、江戸時代にも大名として続いています。そして中世の文化を伝えているわけです。こういう経緯があって、米沢というところはいったん負けたことがあるけれども、中世の文化を伝えてるんだという、そういう気概のようなものがあるんじゃないかと思います。関ヶ原のときに負けてしまって、ギューッと狭いところに集まっていながら、団結心とハングリー精神を持ちつづけてきた、ということだと思うんですね。

近いところで言いますと、戊辰戦争のときに、奥羽越列藩同盟というのがあって、米沢の上杉家もこれに加わりますが、ここでも負けています。明治の頃もそうですけども、あまり勝っているところからは偉人が出てこない。どっちかというところから負けたところからファイトのある人が生まれるということがあるんじゃないかと思うんですね。つ



まりいったん負けてしまったから、頑張らないといけない。そして頑張るには勉強するしかないというふうに思って、東京に行って勉強して成功する人が増えてくるんじゃないかと思います。

本間則忠も、本間喜一も玉庭出身です。玉庭は田舎ですけども、やっぱり一種のハングリー精神みたいなものを感じます。そういうところで何とか偉くなるには、やっぱり東京に行って勉強するしか方法はないということもあったんじゃないかなと思いますが、いずれにしてもこれだけの人物が明治の頃に出てきているということを、もうちょっと味わってみてもいいと思います。最近は歴史ブームで、特に戦国時代は人気があります。ただ、謙信や兼続もいいですけども、近代のこういう人々の歩みというものを発掘しながら、いろいろと考えることも大事じゃないかと思っています。

私の話は前座でございまして、「小池喜一から本間喜一へ」というかんじで、本間先生の若い頃のお話をしました。人物論的にいうと、きちんと勉強を続けられて、だんだん成績を上げていったということがわかったんですが、やはりいちばんありがたいのは、本間喜一（小池喜一）の少年時代を語るための材料が残っているということなんですね。ですからこうした文献を残していただいた小池さんにも感謝しますし、それを実家に送った先生ご本人にも感謝しますけれども。皆さんのお宅にもあると思うんですが、昔の書き物というのは宝物なんで、大事に扱っていただければと思っております。きれいなまとめができませんが、こんなところであとの2人にバトンタッチしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

【司会】 山田先生、ありがとうございました。